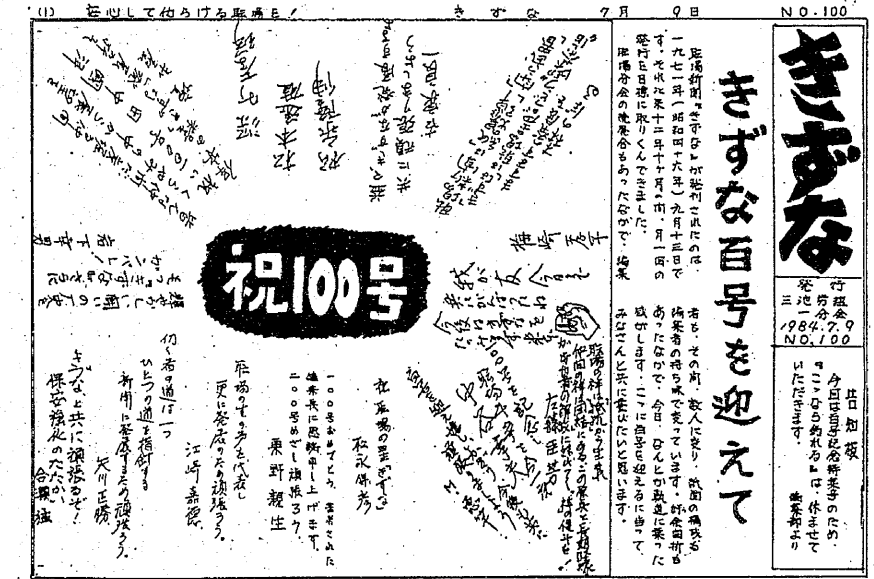


みんなで拍手を— 『きずな』が100号

さらに職場新聞活動の前進を



1面には分会全員の署名、2面には「声」が特集されている

許すなトマホーク

海域、守る、不沈空母

非核地域運動で対抗を

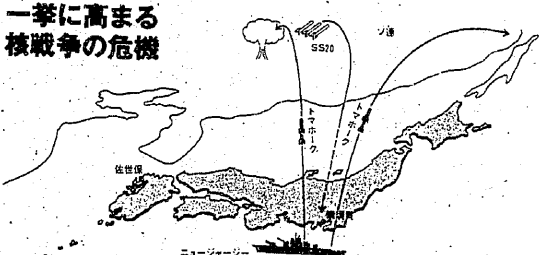
しかし、70年代以降、米・ソ連の艦隊の通航を阻止する公言したが、それは、ソ連のSLBMを閉じこめて撃破しようとするものだ。このように、アメリカもソ連も、自分の聖域を守るために相手の聖域を侵襲しようとする。こうした役割をもつものとして戦域核兵器が登場することになった。アメリカのトマホーク、ソ連のSS-N-10などがそれぞれ、不沈空母日本丸は、ソ連からアメリカの核戦力を守り、支えるというわけだ。だから反核運動は、トマホークを積んだ艦船の寄港を阻止するだけでは不十分だということになる。日本の「不沈空母化」を拒否していかなくてはならないのだ。

①核兵器は日常的に存在する暴力の象徴である。②核兵器の開発と配備は、中央集権的な社会を必要とする。③核兵器は核戦争にそなえる「有事体制」を必要とする。そのゆえにこれに対抗するには、④非暴力、⑤自治、⑥民主主義や人権の確立、といったことが、日常生活のなかで自覚的に追求されなければならない。こうした日常の運動が一人ひとりによって行われることが、非核地域を生み出すことになるのである。

中曽根首相は、日本を不沈空母化するつもりだ。

アメリカの核戦力は、IOBM（大陸間弾道弾ミサイル）、SLBM（潜水艦発射弾道弾ミサイル）それに戦略爆撃機の三本柱からなっている。一方、ソ連の核戦力は、IOBMとSLBMの二本柱が中心だ。

アメリカの核戦力は、IOBM（大陸間弾道弾ミサイル）、SLBM（潜水艦発射弾道弾ミサイル）それに戦略爆撃機の三本柱からなっている。一方、ソ連の核戦力は、IOBMとSLBMの二本柱が中心だ。



一挙に高まる核競争の危機

三池炭鉱の歴史の中から

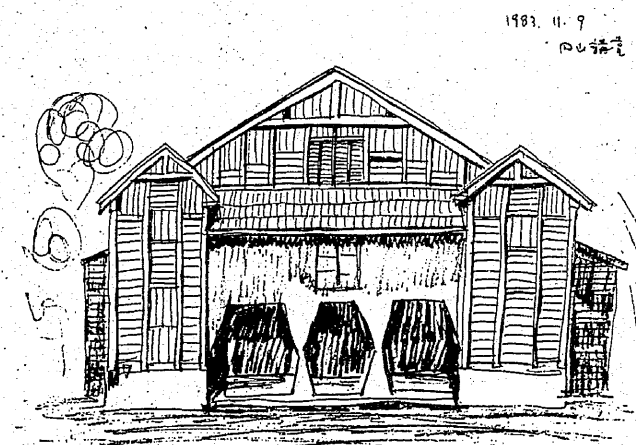
集團納屋と説教場

十六分会 武松 輝男

その三 第八回

「鉱員住宅を集團住宅と言ったようになったのがいつごろからだったかわかりませんが、多分、産業戦士が建てられていた戦時中から、戦後にかけてではなかったか、と思います。ハイ」

「もうひとつ、三度の飯にも事欠くというように、田畑の少ない山地の生活から逃れたいばかりに、ボロボロの三等米（外米）でもいからこゝろ飯を食った、その願いをこめて炭鉱に就職したものの、生活の中心は「食」の確保を保障する、と言われれば過言も誇張もなすべからず仕事をする、と女は男に危険なことをあつても、少女の怪



従うべきはない。これはなにも炭鉱だにやめるものではない、その当時ほどでもない男社会であったといっている。ただ炭鉱の場合は鍋釜をもちつて割り割りトンスラが当たり前になつていたので、釜や鍋の底のヌメリもきれいに洗って、おこなうにはならない、そういう余分の作業が、女の肩にかかっていた。

夫婦を雇い入れると、夫婦が住む納屋が要る。しかも三井経営炭鉱になって、増産のため新しい坑口が開かれると、その納屋も増える。増えたのは納屋ばかりではない。多くの雇い入れた夫婦が、要求などしないように、あるいは炭鉱生活からの割割りをしないように、夫婦が、会社の言うままに従うように、少くとも危険なことをあつても、少女の怪

北炭はいま

吹き荒れる合理化旋風の中で

「いまの北炭は、遠くから扇の瀬戸際にある」といふのは、北炭全体を眺めた場合、十分に考えられます。でも、毎日汗を流して働いているお父さんたちのことを考えると、居ても立ってもおられない気持です。

労働条件が切り下げられ、福利厚生関係が圧縮されるとしたら、生活面での魅力もなくなり、働く意欲も下がって行くのではないのでしょうか……。

そのお父さん関係の費用が年間四億六千万円という現状からみれば、全面的に反対していくことはならない。ある程度はチャンスとしてさらわなければならない。それが、昨今の物価高、おまけに急病で病院に行かなくても地域の条件から交通費だって馬鹿になりません。子供のことも、将来のことを考えたら高学費は行かされたし、買っぱなしは絶対にしてほしいなと思います。

その登川にも吹き荒れる合理化旋風は、情勢もさう、おそいかなって来た。

「なせ、」「いかに一生懸命働いているのになせ、……」組合員は割り切れぬ思いが、どう拭いようもない。

主婦会長の米津香枝さんは言域の人みんなが……。

（北炭労働者から）



登川支部